

Title	天海蔵について：日光天海蔵を中心に
Sub Title	Introduction of the "Tenkai-zo" collection : mainly on the materials kept in Nikko
Author	菅原, 信海(Sugawara, Shinkai)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2003
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.38 (2003.) ,p.1- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神田寺記念公開講座「書物と日本仏教」第四回(二〇〇三年四月二十五日)
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20030000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

神田寺記念公開講座「書物と日本仏教」第四回（二〇〇三年四月二十五日）

天海蔵について

——日光天海蔵を中心に——

菅原信海

一、

ただいま紹介をいただきました菅原でございます。過分なご紹介を頂戴いたしましたので、大変恐縮しております。

本日は、歴史ある斯道文庫、そしてまた神田寺という、これまた友松円諦先生の縁故の寺が主催されます「書物と日本仏教」というテーマの下に、本日招かれまして、お話しすることになりました。いろいろ主催者の皆様方のご配慮に篤く感謝申し上げます。

私、日光に住んでおりまして、日光山輪王寺の宝物殿の館長を仰せつかっておりますが、何か調べたいというようなときがありまして、東京まで出て来るのが大変で、きょうお話しする中にも、調査の不十分な点があるかと思えます。その点は何卒お許し願いたいと存じます。

本日、テーマに掲げました「天海蔵」でございますが、天海という江戸時代の初期の高僧のことは説明するまで

もないと思います。大師号をもらいまして慈眼大師天海と申しますが、いわゆる江戸時代の初期、徳川家康、それから、二代將軍の秀忠、三代將軍の家光と三代に仕えまして、幕府のブレンとして活躍した僧です。

天海は叡山の南光坊の住職になり、更に関東におきましては、川越の喜多院とか、それから、日光の、その当時の光明院の住職になりました。輪王寺という称号は、天海の二代あとに、法親王宮で守澄法親王という、後水尾天皇の皇子ですが、その方が住職になってから、輪王寺宮という宮号が勅許されましたので、それから輪王寺という寺号が生まれました。ですから、江戸の初期の頃は光明院と申しました。その光明院の住職になるということは、これは家康のバックがあつてそうなつたのです。そういうことで天海は、叡山、それから日光へ来たのです。日光と上野とは、本来一緒なんです。住職の法親王宮が日光の門主なのですけれども、普段は江戸にお住まいです。それが上野です。上野も同じく輪王寺という寺号を持っていまして、後に寛永寺ができますので、寛永寺という寺号のほうが有名になつてしまいます。現在、東京国立博物館のある場所が、法親王宮の本坊のあつたところです。その博物館に行かれ、裏手の庭をご覧いただきますと、あそこに今でも日本庭園が残っておりますが、あれはかつての江戸時代の輪王寺宮の本坊の庭園跡です。前置きが長くなりましたが、天海の、簡単にいえばコレクションが「天海蔵」という名前前でいわれているわけです。

「天海蔵」という名称について、これをどういうふうに定義したらいいか、ということになると、天海蔵というのは二つ意味があると思うんです。

一つは、慈眼大師天海の蔵書を集めた経蔵です。現在でもその建物が残っておりますが、それを天海蔵と称する。そういう使い方が、一つあると思うのです。

もう一つは、天海の集めた本。いわゆる経蔵の中の蔵書です。これを指す場合もあると思います。天海蔵という場合には建物を指す場合もあるし、それから、その蔵書を指す場合と二つの意味があると思いますが、厳しく峻別しておりませんで、そのときの前後関係で、これは建物で、これは書物だというように判断しております。

なぜ「天海蔵」という名前が出てきたかということです。本来は、「慈眼堂経蔵」とか「慈眼堂経蔵の蔵書」というのが正しい方なのですが、天海蔵というのは、蔵本に「天海蔵」という判が押してあったり、あるいは「天海蔵」と墨書があります。そういうことから、その蔵書につままして、「天海蔵」と一括していわれてきている、ということになるかと思えます。

天海蔵というのは、そうしますと、日光ばかりではありません。比叡山にももちろん天海蔵の蔵書があります。慈眼大師の名をとりました慈眼堂が、叡山にもあります。叡山の慧日院というお寺ですが、ちょうど滋賀院門跡のすぐ裏手の所にあります。恐らくそこに天海の収集した本があったのだらうと思います。現在叡山の天海蔵書は、叡山文庫に移されておりますが、その内容は全部で七百七十九部、四千二百二十三冊あります。これを内典と外典とに区別いたしますと、内典では六百部、外典では百七十九部。冊数にしますと、内典が二千三百六冊、外典のほうが一千八百十七冊というふうに分かれておりました。天海蔵は日光だけではない、叡山にもあるということです。そして、日光の天海蔵の部数は、叡山文庫の天海蔵の約二・五倍の分量が、収蔵されております。

そうしますと、上野の東叡山、いわゆる寛永寺には天海蔵はなかったのかということですが、上野の天海蔵なるものは、日光と同じですから、ないといえませんが、しかし『東叡山本坊文庫総目録』というのが残っております。その目録から推察しますと、やはり江戸期の寛永寺の蔵書がそれですが、何か天海蔵と思われる書物も

含まれておりまして、これは今後の研究でいろいろはつきりしてくるかと思いますが、天海蔵そのものは上野にはないといわれております。

二、

そこで天海蔵の問題を、日光の天海蔵に絞って、申し上げたいと思います。

日光の天海蔵の場所ですが、天海が寛永二十年（一六四三）十月二日に亡くなり、すぐあとに日光の大黒山に、墓をつくりまします。これを慈眼堂と称します。その慈眼堂のお墓に向かって右手に経蔵が建っております。現在もその建物は残っております。その建物は慶安二年（一六四九）につくられまして、そこに天海の収集したものが納められていました。しかし場所が山の中なものですから、何か事故があつてはいけないということで、昭和五十八年に宝物殿の収蔵庫に移動いたしました。現在の宝物殿の建物は、その前の年の昭和五十七年に完成しておりますが、そこに天海蔵の書物を移すに当たりまして、収蔵庫の中の状態が山の中にある経蔵と同じ条件の温度、湿度を設定しなければいけないということで、一年間、収蔵庫の中の温度、湿度を調整しまして、それが山の中にある経蔵と同じ条件下になったとき、つまり約一年後に初めて収蔵庫のほうに移しました。

したがって日光にある天海蔵の書物というのは、現在、宝物殿の収蔵庫の中に納まっております。もう一つ、天海によつて発願された〈天海版〉一切経印行という一大事業があるのです。これは我が国で初めて出版された一切経です。これも東照宮に行かれますと、陽明門前の階段の向かつて左手に輪蔵、あるいは経蔵という建物があります。その中に納まっております。あまり気がつかないので、誰も日光には〈天海版〉一切経はあるように思っていないようにで

すが、その経蔵の中のぐるぐる回るいわゆる輪蔵に入っているのです。

上野寛永寺の〈天海版〉一切経はどうなっていたかといいますと、もちろんありましたが、太平洋戦争で焼けてしまいました。現在は紀州の雲蓋院というお寺のものを、購入いたしました。上野でも〈天海版〉一切経が揃っております。〈天海版〉一切経があるところは、まだ幾つかあります。日光の〈天海版〉一切経は、上にも述べましたように、東照宮の境内にあるものですから、輪王寺と関係ないのだろうと思われがちですが、輪王寺蔵の一切経として、現存しております。

三、

さて現在、天海蔵はどんなふうになつて収納されているかといいますと、昔は恐らく儉匏箱、和書を入れる本箱がありますが、そういう本箱の中に入っていたのだらうと思いますが、現在は大きな桐箱入です。高さが四十五センチ、幅が九十センチ、奥行きが四十センチあるかなり大きい箱です。これが九十二箱残っております。本来は百箱あったと思われるのですが、現存するのは九十二箱です。九十二箱のうちの四十一箱までが内典、つまり仏典関係です。四十二箱以下が外典になっております。

天海蔵の書物をご覧になつた方々から、大変保存状態がいいとお褒めの言葉をいただくのですが、それは幸いにして、虫食いがほとんどないということです。そのようなよい状態は、恐らく今まで公開しなかつたからです。公開したのもごく最近のことになりますので、ほとんど公開していないかつたということにも一つ理由があると思います。

もう一つは、もともとあつた慈眼堂の経蔵の場所が、かなり湿気が多い土地でありながら、建物の構造上非常に床

が高く、乾燥している建物だったものですから、そういう理由で、恐らく本の傷みも少なかったのではないかと思います。もちろん、山の中ですから鼠の害とか、虫の害が、全くなかったとはいいい切れません。しかし、そのいい状態を保つべく、今も努力しております。

現在、日光の天海蔵にどれだけの書物があるかといえますと、全部で一千九百八部。冊数にしまして約一万百四冊です。この中には〈高麗版〉一切経が六百十四冊含まれております。この〈高麗版〉一切経は、全冊揃いではありませんので、その一部分ということです。

そして、日光の天海蔵の内典は何部あるかといえますと、一千四百二十九部。外典のほうは、四百七十九部でございます。日光の天海蔵の場合は、国の文化財指定のものがございまして、一つは国宝で、つまり『大般涅槃経集解』が国宝指定になっております。そのほか、重要文化財に指定されておりますのが十点。重要美術品に指定されておりますのが二点ございます。

これが大体、日光天海蔵のおおよその分量です。

四、

天海蔵に収集された典籍を分類すると、どういう構成になっているかといえますと、これは長澤規矩也先生が昭和三十四年に讀賣新聞社の総合調査に参加されました、調査されたときの報告があります。それに基づいてお話し申し上げます。

日光天海蔵の内容は、六つに分類されます。

第一番目、天海の靈前に奉納されたもの。これは三河の滝山寺——岡崎の郊外にあるお寺——より、寛永二十年（一六四三）十月二日、この日は天海の命日になります。この日に『法華経』が奉納されているのです。これは恐らく亡くなったその日に、靈前に奉納ということだっただけだと思います。そういう奉納の種類のもの、これがまず一つです。二番目には、天海の所蔵書です。それは、大体五つに分けられまして、一つは、若いときから自分自身の蔵書として持っていたもの。なぜそれがわかるかといいますと、天海は「天海」と名を改める前、随風と名乗っておりまして、小さいときの自分の名前の「随風所持本」という署名が入っているものがあります。「人天眼目聞書」が、その一つです。更には、そのほかにも、「蝙蝠沙門随風」と署名の入ったものもあります。そういう若いときの署名が入っていれば、これは当然若いときから持っていたものだろうということになります。これが一つです。

所蔵書の第二ですが、それは朝廷や公家から寄贈された書物。例えば、『朝野群載抄』というのがありますが、これは後陽成院より賜ったもの。それから『蒲室集』という書物。『蒲室集』というのは耳慣れない本だと思いますが、中国の元時代の臨済宗の僧の詩文とか語録を集めたものです。これは天海が要求したのだろうと思うのですが、是非この本が欲しいということで、京都の公家中原職忠にお願いしなしてもらった本です。これが所蔵書の二つ目になるわけです。

所蔵書の第三は、日光の山内の各院より寄贈された本。日光には、現在は十五ヶ院しかありませんけれど、昔は二十ヶ院あり、その他、坊は百坊というくらい、たくさんのお寺があったのです。そういうお寺の住僧から、天海に寄贈した本。それがあると思います。

所蔵書の第四になります。天海が特に書写をさせた本。この本を書写してくれと頼んで、そして自分の蔵書にし

た「臨濟録抄」というのがありますが、それがそれに当たるだろうと思います。

そして最後に、そのほかいろんな宗派の僧たち、関係のある僧たちから寄贈された本。これがあるだろうと思います。それらがいわゆる天海の所蔵本として残ったのが、一つのグループとしてあるのではないか、ということになるわけです。

五、

構成の三番目には、どういう本が含まれるかといいますと、東照大権現、つまり家康公に対して奉納されたもの。あるいは東照宮に奉納したもの。これがあるだろうと思います。

なぜそういうのがわかるかといいますと、一つ例を挙げますが、『大日経疏』という冊子本があります。二十冊あるのですが、これは京都青蓮院の尊純法親王の奉納ということが識語に出てまいります。寛永九年（一六三二）に奉納したという識語があります。奉納した『大日経疏』は、これは大変古いもので、平安朝の終わりの頃の写本ですが、それを奉納しております。これは東照宮に対して奉納したのですが、やがて天海蔵の中に納まったという、そういう来歴のものです。

四番目に、天海蔵という経蔵ができた後に、慈眼大師の霊前、あるいは輪王寺そのものに対して奉納した、いわゆる寄進本。これがあるだろうと思います。これは京都の法親王宮から奉納になった、先程申し上げました尊純法親王の奉納は、それに類するようなものでしょうけれども、先程申し上げた『大日経疏』は東照宮に奉納になっているのですが、今度は慈眼大師の霊前に奉納になった本。これは藤原惺窩の『惺窩先生文集』がそうだろうと思います。

構成の第五番目。これは天海の生前、または亡くなった後に、旧蔵書と共に何らかの関係で加わったものではないか、というものがあると思います。実は書籍目録を調べていきますと、現在の書籍目録の部数と合わない目録が存在します。というのは、恐らく途中で追加されて、現在の形になったのではないかと思われるからです。追加されたものは、慈眼大師生前のものではなくて、亡くなった後から加えられたものではないでしょうか。

構成の六番目。これは日光山にもともとあったもの。それが天海蔵に入り込んだものではないかと思われまふ。その一つが〈高麗版〉大蔵経です。これはいろいろ調べてみますと、天海よりもずっと前、中世の室町の頃、十五世紀の後半ですが、日光に昌源という権別当がおりまして、昌源の時代に日光に入ってきた。それがやがて天海蔵に納まったのではないかと思うのです。これは全部で五千四十八巻あるのですが、日光天海蔵の場合は六百十四冊現存しております。高麗版については未調査ですが、海印寺版の初期のものだといわれています。現在の天海蔵の構成というのは、大体こういう構成でできているのではなからうか。これは長澤先生の調査報告を土台にしまして、分析したわけでございます。

六、

このように天海蔵の書物というものは、仏典ばかりではなくて、漢籍もある、日本の書物もあるというので、非常に多様性があるということがいえると思います。

天海は、なぜそんな幅広く書籍を集めているのだらう。一体それはどこに目的があったのだらうということですが、内典はもちろん、天台関係の本があるのは当然のことだらうと思うのですが、そればかりではありません。禅宗の本

も非常に多いのです。臨濟関係の教典が非常に多いということ。これは想像するところによりますと、臨濟関係の僧との交流も考えられるかと思えます。

といいますのは、関連することですが、慈眼大師の伝記が、現在三種残っております。その一つの作者は誰かという、臨濟宗花園福寿院東源なのです。天台宗の僧が書くのが常識と思うのですか、臨濟の僧が書いているのです。恐らくそれは天海との交遊関係で、天海のことをよく知っていた臨濟宗の僧が、書いたのであろうと想像されるわけです。したがって天海蔵には、臨濟宗の本がかなり入っております。

なぜそんな多くの本を集めているのだろうか。内典ばかりではなく外典も多い。李卓吾の本が多いのです。ご専門の方は、李卓吾がどういう思想家かということは、ご存知かと思いますが、珍しい本が入っているのです。恐らくそれは天海自身がかなり、自分の学殖を広めるために、広く収集したということと、やはり徳川將軍のそばにありまして、將軍の相談役としていろいろ必要上、こういう本も必要だ、ああいう本も必要だということで集めたのではないかと、思われるのです。

もう一つは、〈天海版〉一切経というのがつくられています。〈天海版〉一切経は、天海が生前にこれを発願しまして、天海が亡くなった後まで、その事業は続きます。それでようやく完成するわけです。何か一つ準備段階というか、その準備上、かなり手広く収集したということもあつたのではないか。これはあくまで想像です。証拠があるわけではありませんけれども、何かそんなふうに思われます。

次に、日光天海蔵の書籍目録について、おおよそのところを申し上げておきたいと思ひます。現在の状況は、どういふ書籍目録と合致するかといひますと、それは大正五年につくられた古谷清氏の「慈眼堂経蔵収納典籍調書」十四冊であります。そして、その索引である「慈眼堂経蔵収納典籍調書 書名五十音分索引」一冊が残っております。特にこの「典籍調書」は、我々が一番頼りにする書籍目録になっております。しかしこれは輪王寺としましては、資産台帳に類するものですから、非公開になっております。この目録の内容が、現状の天海蔵の内容と合致しております。安永六年（一七七七）の「御書籍総目録」と題する墨書銘が残っております。これは、九十二箱ある本箱の第六番目の箱のふたの裏書きでして、書籍を木箱に整理して、現状のようにしたということの記録です。

先程申し上げたように、大きな桐の箱が、九十二箱残っておりますが、その現状が、古谷氏の「慈眼堂経蔵収納典籍調書」の順序立に合致することになります。

さて、次に古谷氏の「典籍調書」以外の書籍目録が、現在数点残っております。それがどういふ位置づけになるかということですが、ここで話が少しややこしくなるかと思ひますが、結論めいたことを先に申し上げておきましょう。

撰述年号のはっきりした書籍目録としては、元文二年（一七三七）の「慈眼堂蔵本目録」があります。現存する書籍目録の中で、年号の一番古いものとして位置づけされるわけです。ところが作成年代ははっきりしません。眼堂蔵経有本目録」、更には「慈眼堂蔵経目録」といふ目録が残っております。私はこれらはかなり古いものではないかと思ひます。もしかすると、この二冊が一番古くて、その次に元文二年の目録がきて、そして安永六年に現在の形に整理されたといふふうを考えれば、わりとわかりやすいのではないかと思ひます。

その一つ一つについてご説明申し上げます。

まず元文二年の『慈眼堂藏本目録』です。天海が亡くなったのは寛永二十年（一六四三）ですから、元文二年まで、九十年程過ぎたあとにつくられた書籍目録です。これは三冊ありまして、中巻が外典で、上巻と下巻が内典です。面白い編集の仕方になっていきます。内典・上巻の並べ方は、これはこの当時行なわれたと思われる天地玄黄で始まる千字文の分類で行なわれております。ただ内典・下巻の分類は、別な分類法になっておりまして、上巻の千字文の分類ではありません。違った分類の方法がされております。

この目録は、実は原本ではありませんで、写しなのです。日光一山の桜本院の孝般が、日光の興雲律院に寄贈した本の写本なのです。日光の輪王寺の他にも、『国書総目録』で見ますと、東大の史料編纂所にもあるように記載されております。並べ方は、いろんな分類の方法があったのだと思うのですが、通常考えられるのは、千字文による分類が大勢だったのだと思います。

推測ですが、一番古いのではなからうかと思われるものが、『有本目録』と『藏経目録』です。この分類の方法は何によっているかといいますと、これは〈高麗版〉一切経の分類によっているのです。しかも、『有本目録』には冊数の総計が出ておりまして、それによりますと八百八十四部、五百九十八冊と記録されております。そうすると、先程申し上げましたように、現在の天海藏の部数は、一千九百八部、一万百四冊ですから大分隔たりがあります。この『藏経目録』ができてからも、かなり後から加わって現在の部数になったということが、これでわかりになるかと

思います。

『高麗版一切經分類目錄』というのは、どういふ並べ方の目錄かといひますと、般若部から始まる分類の方法です。これは中国の元代にもとがあつて、その書籍の目錄の分類の方法を踏襲しているのです。そして私の想像ですが、江戸時代の初期に、慶長から元和にかけて〈宗存版〉といふのがございます。宗存といふ人が一切經を出版しようといふことで計画したのですが、これは途中で挫折するわけです。その〈宗存版〉が〈高麗版〉一切經の並べ方になつてゐるのです。

天海蔵に宗存の『大蔵目錄』が残つてゐます。これは〈高麗版〉一切經の分類の方法をそのまま踏襲してゐるわけです。江戸時代の初期にこういふ並べ方が、宗存によつて行なわれたといふのは、『慈眼堂蔵經目錄』の分類の方法にも、その影響があるのではないか。あるいは、それをヒントにしたのではないかと思われるわけです。そうしますと、『慈眼堂蔵經有本目錄』・『慈眼堂蔵經目錄』などの書籍目錄といふのは、天海が亡くなつたのちの、わりと近い時代につくられた目錄ではないか、と想像されるわけです。作成年代の設定が確定できませんが、想像するところによると、これらが一番古く、その次に元文二年の『慈眼堂蔵本目錄』がつくられる。それを再編成して現在のような安永六年の『御書籍目錄』の形になつてきた。このように考えたらどうかと思つております。

九、

安永六年の『目錄』の並べ方は何によつたのかわからないのですが、分類は華嚴部が最初です。それに阿含部がきまして、それから法華部と続きます。こういふ並べ方の先例があれば、教えていただきたい、と思つてゐます。現

在の一番、二番という箱の番号の順序に間違いがなければ、このような順序になっています。入れ替わったという可能性も、決して否定できませんが、現在の並べ方はこのようになっております。

安永六年のこの『御書籍目録』は、非公開になっておりますが、これを土台にしてつくられたと思われるのが『慈眼堂御書籍目録』とか、あるいは、東大の図書館にある『日光山慈眼堂書庫目録抄出』（享和三年）というものです。これらは大体安永六年の分類の仕方を、踏襲した書籍目録です。

『慈眼堂御書籍目録』といわれる三冊本の第三冊目、「天・地・人」と分かれておりますその「人」の冊は、儒書部、神書部、歌書部というような特殊な分け方しております。ほかのこれに先立つ書籍目録には、こういう分類は出てまいりません。しかも、この書籍目録は安永六年に整理された九十二箱の中の、最後の二箱分を欠いています。九十の箱までの分が、この書籍目録に記録されております。

以上、調査の結果をまとめてみますと、天海が亡くなったあとすぐに整理されたのが、『慈眼堂蔵経有本目録』・『慈眼堂蔵経目録』あたりの書籍目録で、その次に整理されたのが元文二年の『慈眼堂蔵本目録』です。それが安永六年の『御書籍総目録』あたりから現在に至るまで、この形がずっと踏襲されている、ということになるかと思えます。

今申し上げた中に、非公開のものがございまして、大正五年につくられた古谷清の『収納典籍調書』は、ご覧になれません。しかし幸いなことに、昭和九年に、今非公開になっている『収納典籍調書』の原稿本と思われる古谷清稿『日光輪王寺慈眼堂経蔵書籍目録』十五冊という目録が、東大の東洋文化研究所に現在あります。これが現在輪王寺に残っておりますそのものの、恐らく原稿本だろうと思えます。参考になるのではないのでしょうか。

このように大正の初年ぐらいいまでに、いろいろ作成された目録が、基本になりまして、その後昭和三十四年に、讀賣新聞社の日光総合調査が行なわれました。そのときに歴史部門とか、建物の部門とか、彫刻部門とか、自然部門とか、そういう中に天海蔵の調査もありまして、そのときに長澤規矩也先生が主となって調査されました。その報告が『日光山慈眼堂書庫現存国書分類目録』（稿）・『日光山慈眼堂書庫現存漢籍分類目録』（稿）・『日光山慈眼堂書庫古活字印本版種別目録』（活字）・『日光山慈眼堂書庫現存漢籍分類目録』（活字）・『日光山「天海蔵」主要古書解題』（活字）として、残されておりまして、現在活字化されているものが三冊ございます。

『日光山「天海蔵」主要古書解題』が、昭和四十一年に、刊行されました。長澤先生の解題がついております。また龍谷大学に『天海蔵目録』（未見）というのがありますが、大正十二年書写の一冊本のようにです。

十、

ところで江戸時代の天海蔵の書籍の調査というのはよくわかりませんが、『目録』が作られるたびに、調査が行なわれたことは確かかなことと思います。しかし、少なくとも大正、昭和にかけてどんな日光天海蔵の調査が行なわれたかということは、今申し上げた書籍目録でもおわかりだと思えますが、大正五年に古谷清氏による調査が行なわれて立派な書籍目録ができたということが知られます。

それから、昭和三十四年には、長澤規矩也先生を始めとする皆さんによって、日光の文化財総合調査の結果、国書とか漢籍とか、古活字印本のいろいろな目録ができたということ。このときに調査があった結果だと思えます。

そのほか、その中間に位すると思えますが、国宝に指定されたり、重文に指定されたものがあるわけで、恐らくそ

のときに、全部とはいかなくても部分的な調査が、行なわれた可能性は十分考えられるわけで、これは大体昭和十二年頃ではないかと思えます。その頃に恐らく指定品の調査ということで、天海蔵の調査があつたのだらうと思えます。

さて現在はどんな調査が行なわれているかといえますと、天台宗の宗典編纂所が、今まで十九年間、毎夏典籍類のマイクロ化をしております。マイクロ化されたものの中に、皆さんのご覧になりたいものがあれば、宗典編纂所にお問い合わせいただければ、ほとんどの書籍がご覧になれると思えます。

もう一つは、国文学研究資料館の調査で、こちらは外典のほうです。天台宗典編纂所は主として内典ですが、国文学研究資料館では外典を調査しております。これは平成十五年で四年目になるわけです。三年続いております。現在まだ奥書調査が主として、まだマイクロ化までには至っておりません。やがてマイクロ化されれば、また国文学研究資料館で研究者の皆様には便宜が与えられるかと思えます。

古谷氏がいろいろ調査したものですから、古谷氏の天海蔵についての、研究調査論文が残っております。大正五年から大正十二年ぐらいまで『日本及び日本人』という雑誌に載ったり、あるいは『考古学雑誌』、あるいは『史学雑誌』、あるいは『歴史地理』というような雑誌類にその報告が載っております。

一々ご説明すると大変ですが、例えば、「晃山慈眼堂経蔵書籍」という論文題目で、『日本及び日本人』の六百八十五号に、古谷氏の調査論文が載っております。

『考古学雑誌』には、「日光慈眼堂経蔵収納の典籍について」という連続もので、七回に分けて載っております。それらをご参考いただければ、どういう典籍が、どういう事情で入ったかということまで、詳しく記述されております。

それから、長澤規矩也先生の論文にも「天海藏考」とか「天海藏について」というものがあります。「古書解題」の後に、長澤規矩也先生の「天海藏について」という論文が載っております。

以上のように書籍目録からはじめて、調査の状況というものを眺めてまいりました。天海藏の中には、いろいろ特色のある書籍がありますので、今度はその幾つかをご紹介申し上げておきたいと思います。

十一、

第一に、『大般涅槃經集解』（写真1）ですが、残念ながら巻首が欠けておりまして十一巻からが残っております。完全な形ではございません。『大般涅槃經集解』というのは全部で七十一巻ありますが、天海藏に残っているのは五十九巻だけです。五十九巻の内、平安朝のものも若干入っております、奈良朝の写本がその内の四十三巻。平安朝の写本と思われるのが十六巻加わっております。しかし平安時代以前のもの、つまり奈良時代の写本がこれほどまわっているのは大変珍しいということ、国宝に指定されているわけでございます。

第二に、『成唯識論述記』（写真2）は十三巻、重文に指定されております。これは刊本でして、天海藏の中では最も古い刊本です。この中の第三巻目ですが、これはもともと法隆寺にあった本らしいです。法隆寺の旧藏本がこの中に入っております。ヲコト点が付いているのですが、このヲコト点は、南都の喜多院点といわれている点だそうです。喜多院とは興福寺の塔頭の寺でして、天海藏には、この喜多院点の付いたのはまたほかにもありまして、『般若心経幽賛』も、喜多院点のヲコト点が付いたものです。

第三に、『諸事表白』。これは鎌倉時代の写本でして、粘葉装になっております。巻末に室町の墨書、つまり、応永

大般涅槃經集解卷第十一

釋曰云第四

立與實空則

釋說羅從本又義

四相品第七 善善本五如共性品僧共四相性
重石此等是知來因果之法以性為名其四相善惡等
第五問何者已說衣處金剛國等是姓宿金剛國姓法
姓善惡是故答第四也以宿身宿故不令宿法通姓
宿法故入宿姓而法宿日五地也問宿何宿則
姓云何本持心以宿法宿日五地也問宿何宿則
自云表託云應如是持即結也又一或上品所以入我
釋大涅槃令從此下竟解脫之義釋大涅槃也自云
等四事華嚴有說大涅槃也從大何當如是九事釋
竟有善哉問身口善哉顯法善九事之體釋法身顯
大涅槃也廣時解脫義成大涅槃樂以此三義顯
釋者也前品而問云何善哉已由所持之法令廣顯
相法通攝即是來持之義又一義釋自應見便可法
通攝流通之人自德不傳若校園理倫法之究竟人能
於性理之中通攝之之解自行無人於法云覺即人
究竟之故此而通攝二則也皆身口六善法云善法
化樂之理法有體此法云顯佛國釋問自法而
所顯之理一也故云善法釋解脫云是名善法此
四法也善哉口六化樂善法也聚樂九種佛國顯密
此有明微密而九化樂生身有顯也若身有為也從
此善法顯釋問善哉法有異種從法身善法
此解脫之問也

写真1 「大般涅槃經集解」

成唯識論述記卷第一本
竊以六位辯微實象翼而基理二篇玄妙藉義列以探
揅究手非有非空息詮弁於言蹄之外不生不滅絕名
相於常察之津至覺迴照其宗時聖獨觀其室无言之
言風驚鞫遂叙日月玄非有之有波騰溢滿意而海濤
運屬具躡隣智演續鉤深則空性了義樂乎息矣唯識
卅頌者十支中之一支天親菩薩之所製也白虹飛殺
素雲銷景幾花與白外風訛風具葉靈篇非魚譯日願
惟法寶斯文行證誣茲獻識券迹傳燈聯孤明於俱舍
亦同慶而說有解惠傳於攝論表縱聖而談空鑿洽智
固窮神盡般研精此頌用標玄樞釋文未就歸真上選
義繁文幼泉源重秘爰有議法寺十大菩薩激情七轉
激河辨而替微言遊神八藏振金聲而流妙釋淨彼真
識成斯雅論名曰成唯識論藏名淨唯識論義豈權實
陵就歡而飛高理洞者夷捨龍宮而騰救愍諸經之經

天海識

沙門基撰

写真2 「成唯識論述記」

二十六年（一四一九）の識語があります。この『諸事表白』というのは、お寺で行なわれるいろいろな法要の表白を集めたもので、漢文ばかりではなくて、仮名まじりのものも入っています。当時の法要でどういう表白が読まれたかという、それを知る上で非常に大切な資料だということです。実は山田忠雄博士がこれを解説しておりまして、数少ない国語資料として非常に貴重なもので、説話文学の資料としても非常に珍しいものです。『今昔物語』が、表白の中に取り込まれて、どういうふうに表示されているかというのが、この『諸事表白』によって、よくわかるというふうに論文を書いておられます。しかし傷みが激しく、恐らく何人かの人が参考にしたのだらうと思うのですが、大分表紙が傷んでしまっておりまして、そういう貴重なものだけということでも、大事に保存させてもらっております。

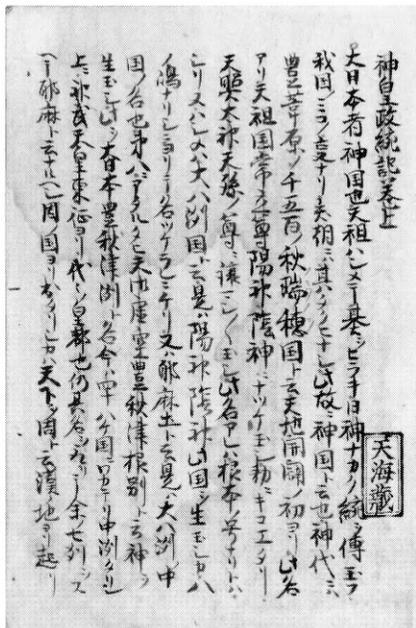


写真3 『神皇正統記』

第四に、『神皇正統記』（写真3）。『神皇正統記』は重要美術品に指定されているものですが、全部で三冊ありまして、室町時代の写本です。『神皇正統記』は、学会でもいろいろ話題になった書物ですが、いわゆる白山本よりも古いといわれている本で、平泉澄博士の研究や、福井康順博士の研究があります。福井博士が、白山本よりは古いと論証し、しかも北朝方の加筆が見られるというふうにいっております。なかなか珍しい『神皇正統記』であると思えます。

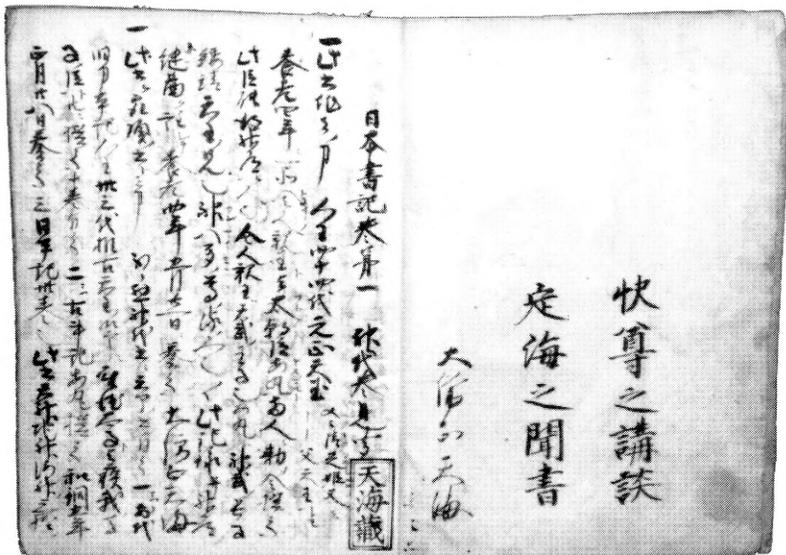


写真4 「日本書紀神代卷見聞」

第五に、神道関係の書物を、幾つか挙げておきます。

『日本書紀神代卷見聞』（写真4）と、この他に『日本書紀私抄』等があります。『私抄』は聖岡の書いたものといわれているものです。『神代卷見聞』は、兼俱の門人である快尊の講義を定海という人が筆写したものです。室町末頃のものですが、それから関連するものに吉田兼見の講義を筆記した『日本書紀聞書』が蔵されています。

もう一つ神道関係の書物として、第六に、『麗氣記』。応永六年（一三九九）の写本といわれているものです。全部で十九巻残っております。普通『麗氣記』といいますが、現在あるのは十九巻で、十八巻に王系図（神様の系図）が加わっております。それで十九巻になるわけです。そのほかに目録が付いています。これは表装が若干違うのですが、寛永十二年（一六三五）四月二十日の天海の花押の入った目録が付いております。『麗氣記』はこの頃また研究が盛んですが、その分類でいきますと、B系本に属するもので

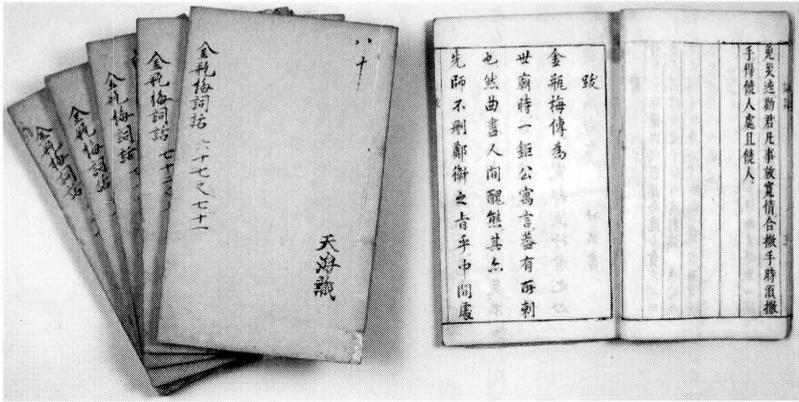


写真5 『金瓶梅詞話』

はないかと思っております。

十二、

第七に、『春秋穀梁伝』の断片ですが、これは実は断片でも論義書の表紙に使われていたのです。つまり、表紙の紙の裏打ちに使われていたようです。珍しいこの『穀梁伝』は、鎌倉初期の写本らしく、また朱点と墨点が入っております。

第八に、『周易』の王弼注。これも珍しいものです。この注は、仮名書きになっていのです。仮名書きの注というのは大変珍しいもので、これと同じものは、現在まだ発見されていないようです。大変珍しい本です。

中国の小説類のほうに入っていきます。有名なものとしては、第九に『金瓶梅詞話』（写真5）があります。万暦の刊本です。現在残っている『金瓶梅』の刊本ではこれが一番古いといわれているものです。同じものが旧北京図書館。現在の、中国国家図書館に残っております。それと同版だといわれているものです。実は徳山藩の毛利家からも発見されまして、一紙異なるところがありますが、五回目の末葉、最後のところですが、これを加えて、五冊本で影印本が昭和三十八年に大安という、中国出版の本

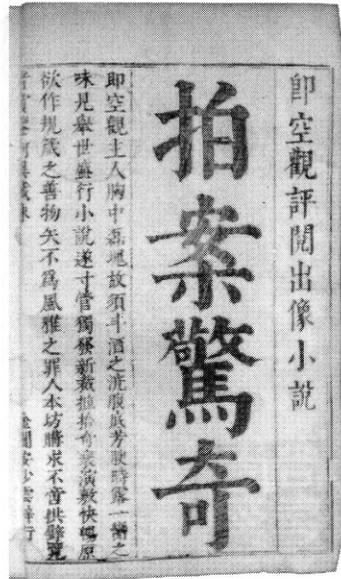


写真6 『拍案驚奇』

を扱っていた書店から刊行されております。

第十に、『拍案驚奇』（写真6）。この『拍案驚奇』は、初版本ではないけれども、もとの形を伝えている天下の孤本だといわれています。後に刊行されたもので、三十九巻本は現在広島大学にあるようですが、四十巻本は天海蔵にしか残っていないというものです。これも影印本が昭和六十一年、ゆまに書房から刊行されております。

『金瓶梅詞話』にしても『拍案驚奇』にしても、今では

影印本でご覧になれると思います。

第十一に、『西遊記』（写真7）。現在二十巻本が二つと十巻本が一つ残っております、十巻本、二十巻本は両方とも明の万曆刊本ですが、写真に掲げたものが、北京図書館、現在の中国国家図書館にあるものと同版です。現存する『西遊記』中一番古いだろうといわれているものです。『西遊記』はいろいろ研究されて、東北大学の磯部彰先生が研究されています。

第十二の『東度記』（写真8）。これは珍しい本だと思えます。明の崇禎八年（一六三五）の刊本で、これは密多尊者という人が達磨さんと共に南から東のほうに渡ってきたという、そういう書物です。

清代になりまして『東遊記』というものがありますが、明刊本には『東度記』以外、これに似たものは存在しないといわれております。中国の小説は私の専門ではないので、いろいろ間違ったことをいっているかもしれません。

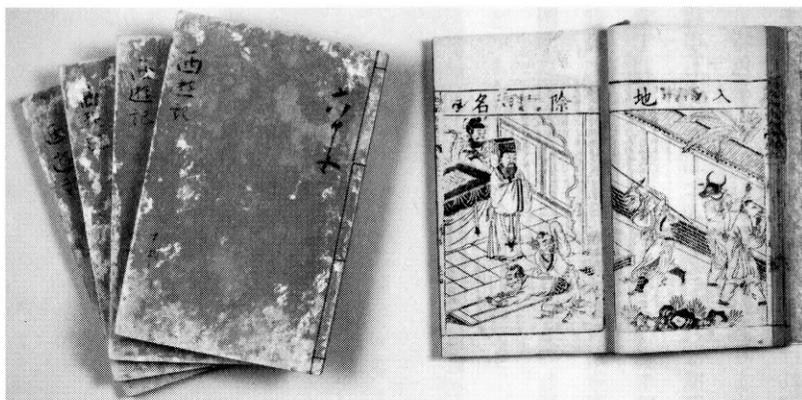


写真7 「西遊記」



写真8 「東度記」

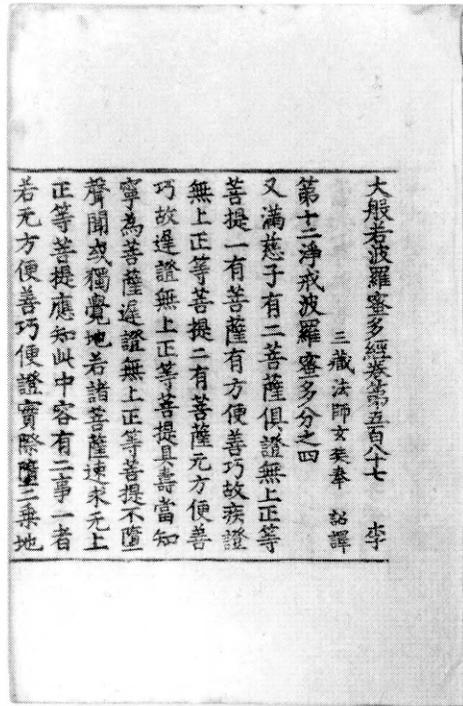


写真9 <高麗版> 大蔵経

国の重要文化財に指定すべきものと思っております。

第十三に、これは天海蔵以前からあったものが、天海蔵の中に入ってきたと思われる〈高麗版〉大蔵経(写真9)です。写真で見ると小さいようですけれども、これは大版なのです。折本ですが、六百十四冊現存しております。先程申し上げましたとおり、これは室町の頃の昌源がいたその頃に入ったのではないか、と思われるものです。

特色あるもの、まだ幾つかあります。例えば、李卓吾の書物が十冊ぐらい入っています。そんなものを挙げれば、まだまだきりはないと思えますけれども、特にその中から幾つかを選んでご紹介申し上げます。

こう見えますと、中国の小説類、これは天海蔵にしかない本、天下の孤本だというのが幾つか残っているのです。私自身は、こういうものは早く重文に指定していただいて、保存をきちんとしていただければ、ありがたいと思っております。なかにはいくつかは指定されたものもありますが、次の機会には天海蔵全体を、指定すべきものと思うのです。そうなると調査が大変なことになってきて、おいそれとは調査ができないかと思っておりますが、いずれは全部を



写真10 東照宮境内の輪蔵

これらと共に、もう一つ触れておかなければならないのが、第十四に〈天海版〉です。詳しく申し上げますと、寛永十四年（一六三七）から一切経の印行が始められまして、慶安元年（一六四八）まで約十一年間かけてつくられた我が国最初の一切経です。これは宋版をもとにしておりまして。全部でどれだけあるかといえますと一千四百五十三部。巻数でいきますと六千三百二十三巻といわれています。巻数は一説によると六千二百三十二巻という説もあるので、どっちを信じていいかわかりませんが、ともかく六千二、三百巻のもので、完成されたのが慶安元年の四月十日。

七日。ちょうど家康公の命日に当たる日です。家康公三十三回忌のときに完成されております。さて日光の〈天海版〉はどこにあるかというところ、東照宮の境内にある輪蔵（写真10）の中に現存しております。これはぐるぐる回るいわゆる輪蔵になっております。一面、一面の扉を開けますと、そこに経本が入っております。その前に三人の御像がありますが、これは傳大士と二童子の像です。

〈天海版〉一切経の全体像、それをお知り

になりたければ、この目録が、大正大藏經の最後のほうに「法宝総目録」というものがありますが、その中に「日本武州江戸東叡山寛永寺一切経新刊印行目録」五巻が活字になって載っております。どういものが入っているか、それをご覧になればおわかりになると思います。それから、日光の輪王寺の宝物殿にも「一切経目録」といのが、これは江戸時代の写本ですけれど、五冊本で残っております。そんなのが参考になるかと思ひます。

先程も申し上げましたけれども、現存する〈天海版〉一切経は、日光のほかどんな所に残っているかといひますと、私の知り得た範囲では、叡山文庫です。比叡山の天海蔵の中にある。それから、上野の寛永寺です。これは空襲で焼けてしまいましたけれど、現在は和歌山のほうから購入したものがあつた。それから、京都の青蓮院と、京都の毘沙門堂です。毘沙門堂は全部は残っていませんで、二百九十箱残っていますので、半分以下ということす。京都の西本願寺の経蔵にも残っております。東本願寺も多分あるのだろうと思ひますが、確認しておりません。京都の本圀寺や、東京では池上の本門寺にあるといわれています。以上のように〈天海版〉一切経があるといわれているのですが、私は全部確認したわけではありませんが、研究書の記載から、こういう所にあるのだということなので、それを挙げてみました。

天海蔵の中には、このような一切経としてセットになっているのとは別に、〈天海版〉のものが二十五種類ほど収納されております。大体寛永十四年から十八年に刊行されたものが、二十五種類納められております。天海蔵の中には、今申し上げた〈天海版〉以外に、当時の〈叡山版〉とか、〈高野版〉とか〈宗存版〉、そういうものも残っております。〈宗存版〉の目録に、『大蔵目録』(写真11)というものが天海蔵の中に納められております。これは出版予定目録で、完成しなかつたのですが、こういうものを作ろうとした、宗存の意向がわかるかと思ひます。〈宗存版〉は

大藏目錄卷上

大海藏

天地玄黃宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒來暑往秋收冬藏閏餘成歲律呂調陽雲騰致雨露結為霖金生麗水玉出崑崙劔號巨闕珠播夜光果珍季奈 函入六百卷

大般若波羅蜜多經六百卷 大唐三藏法師玄奘奉詔譯

入紙七百四十八牒十八張

業重函入二十卷 入紙三十三牒七張

放光般若經二十卷 西晉三藏無羅叉共竺叔蘭譯

苾芻海遙入二十七卷 入紙四十五牒五張

摩訶般若經二十七卷 亦名大品般若經 魏世三藏鳩摩羅什共僧伽藍譯

入紙十一牒十六張

鹹函入七卷 入紙十一牒十六張 西晉三藏竺法護譯

光讚經七卷 入紙十牒十張

河函入八卷

戊申年高麗國大藏都監奉

勅雕造 一代藏經 開梓捐寫 報佛恩德 結緣眾生

同證佛果 二世安樂 乃至法界 平等利益

慶長十八年九月吉日 於洛陽梓之

大本願伊勢聖叅坊宗存

當施主

開板 吉野入道意齋

西田勝兵衛尉

写真11・12 『大藏目錄』

先程申し上げましたとおり、〈高麗版〉一切経をもとにして、やろうとしたわけです。

その一つが、〈宗存版〉の『法華経』の奥書でわかります。宗存という人はもともと伊勢の人なのです。宗存版『大蔵目録』のほうには、「伊勢聖乗坊宗存」（写真12）と記してありますが、法華経の奥書には「本願常明寺宗存」と書いてあります。常明寺というのは、北野天満宮の経王堂のこととして、京都に来て、こうしたものの出版を心がけた所です。

十四、

時間もなくなつてまいりましたので、天海蔵には、どういう特色があるかということですが、重ねて申し上げますと、不思議なことに李卓吾の本が非常に多く入っているということです。これは想像するに、李卓吾という人は、天海の少し前に現れた人ですから、その頃の中国の思想家の本が、かなり入ってきていた関係があるのかと思っております。

それから、天台以外では禅宗の本が多いということです。外典では儒教、それから、中国の歴史関係の書、そして、小説類などそういうものが多いということです。ただ、そういうものがあるから、天海がそれらを勉強したかということ、勉強したものもあるかもしれませんが、どの程度天海が読んだのか、そこまでは突きとめるわけにいきません。中には天海の手書き入れらしきものがあるというので、これは確かに読んだろう、というふうに思われるものはありますが、あちこちから寄贈されたものもあるでしょうから、それらを全部はみていないと思うのです。とはいってもかなり幅広くいろいろなものを、集めているということは、確かだと思つたのです。

そんなことから天海蔵を通して、天海の思想傾向というものを、探ってみようかと思えます。これは当然のことだと思えますが、いわゆる仏典の研究というものに専念された、その跡が窺えるということです。特に仏典でも、天海が好んで残された本の中に、論義書が多いのです。天海は議論好きだったといわれていますが、そのせいか論義書がかなりあります。天海の事蹟をみてもわかりますし、当時の記録である『徳川実紀』をみてもわかりますが、家康公に召されて論義を御前でやるとか、そういうことが盛んに行なわれている。したがってそのときの論義の手控的なものが残っております。現在、その『法華経』論義の一部分が『続天台宗全書』の中に入っております。

それから、神道関係の書物や、歴史書等々が多いということは、これはやがて天海が、家康公を東照大権現として祀るときの神道、つまり山王一実神道と申しますが、それに役立てたのです。天台宗の神道は山王神道といいますが、それを基盤に天海が創唱したのが、山王一実神道です。その理論形成にこのような書物を役立てた。特に神道書などを役に立てたのではないかと思えます。山王神道のほうは『山家要略記』とか、『厳神靈応章』という山王神道の書物がありますが、そういう書物もちろん入っていますし、それ以外にまた『麗気記』、これは両部神道の書です。それから、いわゆる真言系の神道の書です。そういうものをきちんと読んで、そして山王一実神道という神道理論を構築していったのだろうと思えます。

十五、

皆さんご存知のとおり、家康公は駿府で亡くなり、すぐに久能山に葬られるわけです。久能山に葬られてから、今度は日光に遷されるわけです。亡くなる二週間ほど前になりますが、家康公は、本多正純と天海と崇伝との三人を枕

辺に呼びまして、自分が死んだ後のことを指示するのです。その中の一つに、死後一周忌を経た後日光山に遷し祀れ
というのです。そのとき小さき堂を建ててくれと指示しているのです。当初の東照社は、決して小さな建物ではあり
ませんが、遺言では小さきお堂を建ててくれ、関八州の鎮守とならんといつているのです。その他三河の大樹寺に位
牌を設けろとか、お葬式は増上寺でやれとかいろいろいつています。

そういうわけで遷葬するときに、もともと久能山に祀られたときには、吉田神道によって祀られていますが、日光
に祀るときには吉田神道ではなく、山王一実神道で祀ることになります。日光は山王一実神道で祀るのですが、その
祀る思想的な神道理論が、天海の頭の中でこれらの書物をもとにして構築されたのだと思います。今、東照宮は東照
大権現として、神と祀っていますが、その本地仏は薬師如来です。ですから、陽明門のすぐ左へ行つた所に薬師堂と
いうお堂があります。これは本地仏を祀つたところです。薬師が本地で、脇侍に山王権現と摩多羅神が祀つてありま
す。山王権現は天台の比叡山の守り神。いわゆる山王権現です。この本地は釈迦です。摩多羅神は、よくわからない
神様ですが、摩多羅神は阿弥陀如来が本地です。そういうふうを中心に薬師を祀つて、釈迦と弥陀というのが脇侍に
くるわけです。そういう形で東照宮は祀られているわけです。

この祀られ方をみると、叡山の三塔の形です。比叡山は東塔が根本中堂で、薬師。西塔が釈迦です。横川が阿弥陀
です。比叡山の三塔の形をそっくり東照宮を祀るときに移してきているわけです。このような構想は恐らく天海の頭
の中で、ちゃんとできていたのだと思うのです。その形を日光に移している。これが山王一実神道で、それがどうい
うところに理論化されているかといえますと、天海の書いた『東照大権現縁起』にみられます。全三巻ですが、その
第一巻、つまり神道の巻に神道の理論的な教義が並べられております。

山王一実神道に拠って家康公を祀った。その目的は何か。これは恐らく、徳川幕府の維持と将軍家の永続を祈っているのだと思うのです。それは山王一実神道は別名東照宮神道といわれるぐらいのもので、そういう意味で徳川幕府、徳川将軍家というものの永遠を願ったのです。それが山王一実神道です。しかし、それだけではなく、やがてはそれが除災招福へと向かっていったのだらうと思うのです。いわゆる一つの宗教としての価値を、持たせてくることになった。そういうことがいえるかと思えます。その理論づくりとして、先程挙げました『麗気記』とか『日本書紀見聞』等々という神道関係の書物が、天海の頭の中で昇華されて、そして山王一実神道というものへと、進んで行ったのではないかと思えます。

長々と専門でもないことまで話が入り込みました。ご清聴を感謝いたします。どうもありがとうございました。

(拍手)

— 了 —